

樹の着果量に応じて粗摘果を進めましょう！早生温州では7月上旬まで、普通温州では7月中旬までに、葉果比 10～15 を目安に行ってください。

1 令和5年6月の気象

令和5年6月の半旬別の気象を表1に示した。平均気温は、第5半旬では平年並で、それ以外では平年より高かった。月平均気温は21.9℃で、平年より1.0℃高く、前年並であった。

降水量は、第1、2半旬は平年及び前年より多かった。第3～第6半旬では平年よりも少なく、6月前半に降雨が集中した。月合計は220.0mmで、平年の102%、前年の115%であった。

日照時間は、第1～第3半旬では平年より少なく、他は平年並または平年より多かった。月合計は123時間で、平年の91%、前年の74%であった。

表1 令和5年6月の気象 (暖地園芸研究所)

半旬	平均気温(℃)			降水量(mm)※			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	20.6	19.7	20.6	128.0	27.9	0.0	25	28	40
2	20.8	20.1	18.1	56.5	33.4	52.5	13	25	19
3	21.7	20.5	18.8	30.0	38.9	38.5	9	21	11
4	22.4	21.2	22.1	0.0	41.3	18.0	35	20	10
5	21.4	21.4	23.6	5.5	38.5	83.0	21	20	24
6	24.6	22.6	25.9	0.0	34.9	0.0	20	21	63
平均/計	21.9	20.9	21.5	220.0	214.9	192.0	123	135	167

※降水量については暖地園芸研究所内の観測機材が不調のため、アメダスデータ(館山市)から引用

2 果実及び樹の生育

暖地園芸研究所における本年の着果量は、早生温州では平年並～やや多いである。普通温州では平年より少ない樹が多いが、着果量が多い樹もみられる。そのため、後述するように樹の着果量に応じて摘果する時期及び量を調整する。

暖地園芸研究所内の病害虫の発生状況は、6月ごろからアブラムシ類、アゲハ類、ミカンハモグリガ、アオバハゴロモが発生している。また、黒点病の発生がやや多い。摘果作業と併せて枯れ枝の剪除を行う。

3 7～8月の栽培管理

(1) 摘果

摘果は粗摘果と仕上げ摘果の2回に分けて行う。1回目の粗摘果は、早生温州では6月下旬～7月上旬、普通温州では(樹勢が低下している場合のみ)7月上旬～中旬に葉果比10～15程度で行い、その後8月上旬～9月上旬(粗摘果の1ヶ月後)に葉果比25程度に仕上げ摘果を済ませる。着果の少ない裏年の樹では粗摘果は控え、仕上げ摘果から行う。仕上げ摘果の基準は、1果当り葉数で早生温州は25～30枚、普通温州は20～25枚である。

(2) マルチ資材の被覆

高品質果実の生産にマルチ栽培は有効である。被覆は、夏の乾燥期が終わり秋雨期に入る前の8月下旬、遅くとも9月上旬に開始する。土壌の乾きやすさや灌水設備の有無によって、開始時期や被覆面積を調節する。マルチの適地は、ゆるやかな傾斜地で日当たりや水はけが良く、風の影響が少なく、普段から高品質の果実が生産できる園地である。

(3) 主な病害虫の防除

1) かいよう病

本病は2次伝染を繰り返すので、薬剤で春梢に対する初期防除を徹底する。果実に対しては梅雨から果実肥大期を重点に防除し、その後は夏秋梢に対するミカンハモグリガの防除を行う。ただし、銅水和剤はマシン油乳剤、デランフロアブルとの近接散布による薬害が起こりやすいので、2週間は散布時期をずらす。また、特に感受性の高い品種を栽培する場合には、園地の防風対策を行う。

2) 黒点病

枯枝が最も重要な伝染源となるため、生育期を通じ、除去を徹底する。また、密植園の伐採、老木の更新など、各種要因により枯枝ができないような栽培管理が必要である。薬剤散布は、梅雨前の5月中下旬から開始し、以降、累積降雨量が250mm前後に達した時点で散布を行う。防除は、9月上中旬まで継続して行う。

3) そうか病

本病は、降水量が少なくても長く続くと発病が多くなる。加えて、通風不良で降雨後に乾きにくい場所や、窒素肥料が効きすぎている園で発生しやすい。通風を良くし、多肥にならないよう、施肥は適切に行い樹勢を良好に管理するように努める。防除適期は発芽期から落弁期であるが、多発園では薬剤防除を徹底する。

3) ミカンサビダニ

6月頃から9月まで果実を加害する。被害が拡大する恐れがあるため、果実1～2個の被害を見たら直ちに防除する。特に梅雨明け直後に行う防除が重要である。樹冠の内部・上部など薬剤のかかりにくい部分に発生が多いため、摘果時に注意深く見る。黒点病の防除に用いられるマンゼブ剤により同時防除が可能だが、多発した場合は登録のある殺ダニ剤の使用が有効である。

4) ミカンハダニ

果実や葉を加害する。増加期の6月にはマシン油乳剤(97%)150倍液を散布する。この時期の判断は、寄生葉率30%を目安にする。また、9～10月に多発するので、秋期には寄生葉率20%を目安に殺ダニ剤を散布する。

5) ミカンハモグリガ

通常の結果樹では徒長枝は冬季にせん除するので、本虫の被害を受けても防除の必要はない。しかし、激発した場合や、隔年結果樹、高接ぎした樹や苗木、幼木など、新梢を利用する樹では防除が必要である。新葉展開初期から2～3回、殺虫剤を散布する。

なお、表の数値は表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計は一致しない場合があります。

《 生育情報の問合せ先 》 千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室

電話 0470-22-2961

《 生育情報の発行元 》 千葉県農林水産部生産振興課園芸振興室

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>